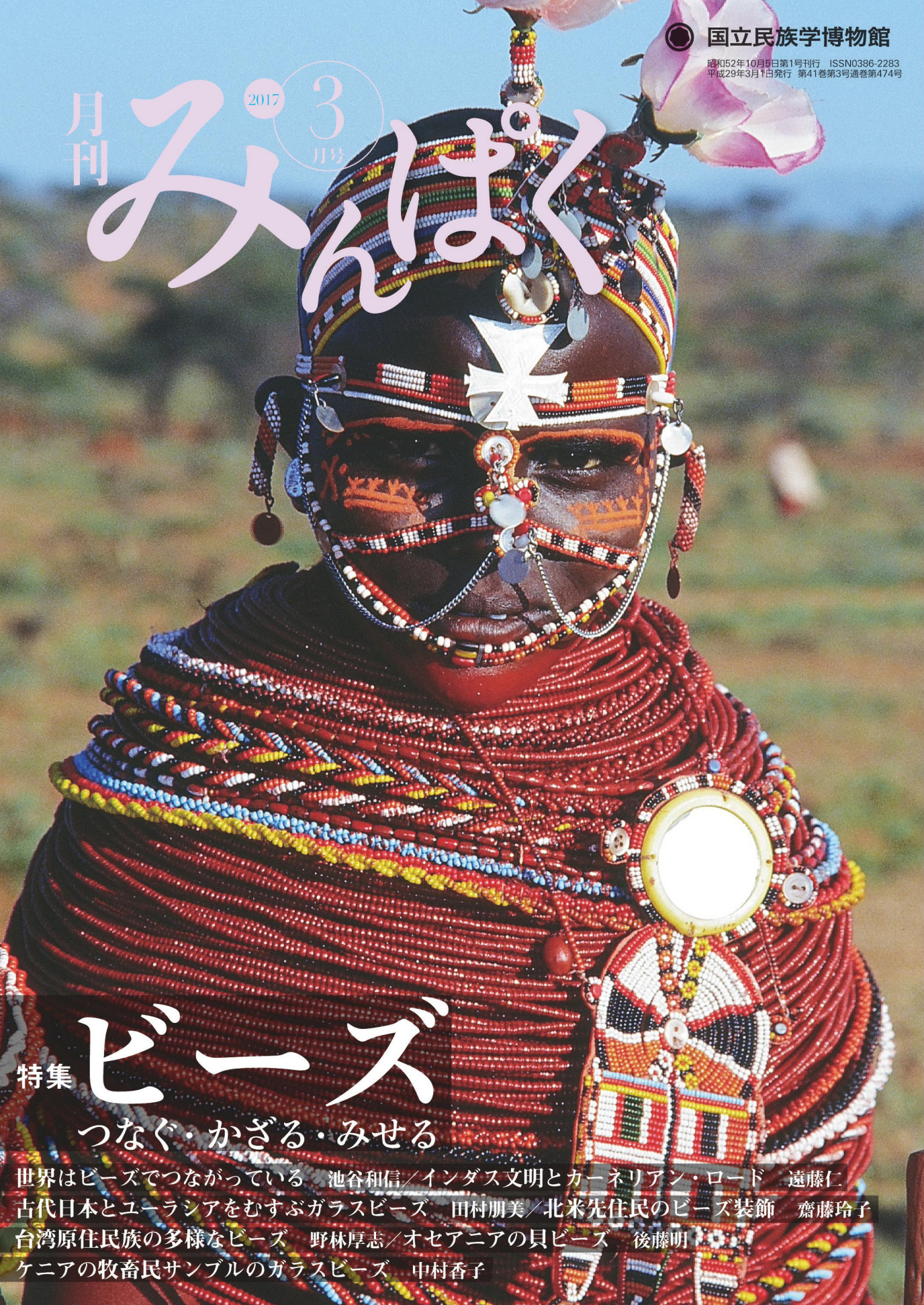


月刊

2017

3
月号

みんぱく



特集

ビーズ

つなぐ・かざる・みせる

世界はビーズでつながっている 池谷和信／インダス文明とカーネリアン・ロード 遠藤仁
古代日本とユーラシアをむすぶガラスビーズ 田村朋美／北米先住民のビーズ装飾 齋藤玲子
台湾原住民族の多様なビーズ 野林厚志／オセアニアの貝ビーズ 後藤明
ケニアの牧畜民サンブルのガラスビーズ 中村香子

万博記念公園春景色

須藤 健一

プロフィール
1946年新潟県佐渡市生まれ。2009年より国立民族学博物館長。埼玉大卒業、東京立大大学院社会科学研究所単位修得退学。文学博士。75年より民博助手・助教を経て、93年神戸大国際文化学部教授、同大附属図書館長。専門はオセアニアの社会人類学。著書に『母系社会の構造』（紀伊国屋書店）、『性の民族誌』（人文書院）、『オセアニアの人類学』（風響社）など。第16回澤澤賞受賞

すべての展示場が四〇年ぶりに生まれかわる。二〇〇八年から進めてきた新構築が三月のアイヌ家屋の屋根の葺き替えで完了する。

私が館長に就任したころ、「万博公園冬景色」という新聞の社説を目にした。本館と公園の施設を訪れる人影のまばらさを嘆き、その発展を鼓舞した記事であった。たしかに、開館時六〇万の入館者数が四分の一にまで落ちこんだ。

本館の展示は教員の研究成果の公開の場である。新構築はその成果を先鋭的に表現して本館の活性化をねらっている。主コンセプトは三つ。まず、文化の担い手である現地の人たち、展示する教員、そして来館者の三者が意見を出し合う、フォーラム型展示である。二つめはグローバル化の影響を各地の人びとが伝統文化に接ぎ木して新しい文化を創造する動きに注目する、グローバル展示である。三つめが、世界各地の文化と日本文化とのかかわりの展示である。このコンセプトは、新展示に生かされており、入館者にも「みんなくは生まれかわった」と好評である。

新構築は展示だけでは終わらない。モノが生まれた社会・文化的背景を入館者に知ってもらうことが重要。展示のあと、現地から民族芸能チームやモノづくりの専門家などを招いて実演してもらい、入館

者に「生きた文化」との接触をすすめている。この新展示や関連イベントの展開により、小中高校生をはじめ一般の入館者が二十数万人と大幅に増えている。

近年、世界の民族学博物館のなかには、民族誌展示から美術展示へ志向するところがある。本館の展示の使命は、衣食住から、美術・芸能、儀礼・宗教とその歴史変化をもふくめての総合的な演示にある。

一方、フランスのケ・ブランリ美術館や大英博物館は、文化人類学者よりも美術史家の眼をひく仮面や彫像などを民族資料から選別して展示する傾向が強い。両館が所蔵・展示している諸民族の仮面や彫像と同種の資料のほとんどを本館も収蔵している。三年前、東京の国立新美術館と主催した「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」でその一端を紹介した。私は入館者が生活用具であるモノを見て対話し、ときにはさわり、モノのふるさとの人びとの暮らしや文化を心に描いてほしいと思っている。ある基準で選ばれた「美術品」だけの展示は、「イメージの力」展のように美術館と博物館とが連携する特別展示としておこなえばよい。

エキスポシティの出現で賑わう万博記念公園としても、新構築で生まれかわったみんなくはのさらなる発展を期待する。

月刊 みんなく

3月号目次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
万博記念公園春景色
須藤 健一</p> <p>2 世界はピースでつながっている
池谷 和信</p> <p>4 インダス文明とカーネリアン・ロード
遠藤 仁</p> <p>5 古代日本とユーラシアをむすぶガラスピース
田村 朋美</p> <p>6 北米先住民のピース装飾
——ヤマアラシのとげからガラスピースへ
齋藤 玲子</p> <p>7 台湾原住民族の多様なピース
野林 厚志</p> <p>8 オセアニアの貝ピース——ソロモン諸島の貝貨を例に
後藤 明</p> <p>9 ケニアの牧畜民サンプルのガラスピース
——母から娘へと受け継がれる恋人からの贈り物
中村 香子</p> | <p>10 ○○してみました世界のフィールド
中国の鉄道の今むかし
塚田 誠之</p> <p>12 みんなく Information</p> <p>14 味の根っこ
雑煮
石毛 直道</p> <p>16 文化遺産おもてうら
危機にさらされる世界遺産
——登録三〇年が経過したクスコの今
八木 百合子</p> <p>18 手芸考
頑張りすぎない手芸
野田 涼美</p> <p>20 ながなんちゃ
おしりふき
菊澤 律子</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|

ビーズ

つなぐ・かざる・みせる

さまざまな素材と素材をつなげて作られるビーズ。
 人類の拡散とともにアフリカ大陸のみならず、
 アジア、オセアニア、アメリカなど世界中に広がり、現在でも作り続けられている。
 ビーズは装飾品として、財として交易路を渡り、
 その地その地で意味を見出されてきた。
 特別展「ビーズ」の開催に関連し、ビーズの歴史的、地域的な事例をとおして、
 人間にとってビーズとは何かを考える。

人類最初のビーズは貝であった

世界はビーズでつながっている

池谷 和信 民博民族文化研究部

今から三〇年も前のことになるが、一九八七年の夏、アフリカ南部のカラハリ砂漠の村に滞在していた。狩猟や採集の民といわれるサン(ブッシュマン)の暮らす村である。わたしは、毎日、狩猟についていきたいと言ったが、なかなか許可がおりない。あげくのはてに、コーンケネ(行きたい)というあだ名をつけられてしまった。そんななか、村の女性のある活動に興味をもった。ダチョウの卵の殻を細かくくだいてから穴をあけて、首飾りを作るというものだ。卵の殻は意外と厚くて堅い。穴をあけるにはキリを使い、動物の角で卵殻をけずり、動物のけんを糸状につなげて通していた。当時、首飾りや腕飾りは民芸品として作られていた。

ものをつなげて生まれる世界

かつて、ダチョウの卵殻からできたビーズは人類が最初に作ったビーズであるといわれていた。四万年も前のことである。現在では、貝の方が古くて一〇万年も前のことになっているが、いずれにしても、わたしたち人類が誕生してから現在まで、ビーズは存在し続けてきた。同時に、人類の拡散とともに、アフリカ大陸のみならず世界各地で見出すことができる。

ビーズとはいったい何であろうか。わたしは、「さまざまな素材をつなげたもの」としてビーズをとらえている。これは、簡単そうに意外に難しい。チンパンジーはできない。人



ダチョウの卵殻をけずるサンの女性

の場合も二歳にならないとつなげることはできないという。素材は、身近に生息する動植物から鉱物や人工物まであまりにも多様である。ジュズダマや木の実のような植物、動物の歯や虫の羽根、さまざまな貝、そしてコハクのような化石、トルコ石や瑪瑙など自然界のものをつなげて生まれる世界なのだ。

ものと価値とを人がつなげる

世界中のビーズをみると、人類によるものものつなぎ方には、普遍的な特性がありそうだ。一列にして円状にするのが、どうもどこでも基本のようである。しかし、その形は類似していても、人びとはそれぞれ独自の意味づけをおこなってきた。古代エジプトでは、青緑色のファイアンスビーズが使われており、死からの再生のための祈りが込められている。チベットでは、石でできたビーズは魔除けである。数珠は、仏教では一〇八個をつなげることに意味をもったりするほか、イスラーム教、キリスト教のカトリックでも共通にみられ、人びとの祈りの場面には欠かせないものだ。



ミイラのビーズマスク(エジプト)

このように、ものと人とのあいだにあらたな形が生まれたのが興味深い。古代の日本では、瑪瑙から勾玉や管玉が作られ首飾りとして使われて、各地の豪族が社会的な地位を示すためにつけたといわれる。出雲の玉造は、ビーズを作っていた地域であることを地名で伝えている。これらの石の大半は、当時の中心地であった大和へ、そのほか各地に運ばれたというのだ。

ビーズを求めてつながる人びと

ビーズは、人とのみでつなげるのではない。人と人をつなげるのにも有用であった。民博の収蔵庫のビーズをほぼすべて見る機会があったが、白色のタカラガイが複数ついたものをよくみかける。パプアニューギニアやカメルーンのイス、



近年注目を集めるペーパービーズ

コンゴの仮面、エチオピアの家のなかの壁掛けであったりする。いずれもが、内陸に暮らす民族が使用したものだ。彼らが共通してこの貝を使ってものを飾っている点に興味深い。つまり、この貝は、おもに産出する熱帯の海岸部では珍重されず、内陸部に運ばれることにより価値が増すのだ。内陸と海岸のあいだの人びとを貝ビーズがつなげているといってもよいであろう。

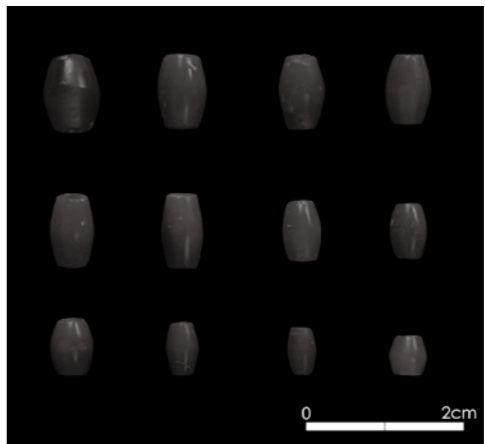
このほかにも、ガラスビーズは、世界的なレベルで人と人を結びつけることができる。一九世紀はイタリアのヴェネチア、二〇世紀にはオーストリアのスワロフスキーや日本の大阪のマツノなどのガラスメーカーなどは世界に向けて展開してきた。そして現在、グローバル化のなかで世界のガラスビーズの動きをみると、生産と消費という二地点間に、ものだけではない人と人とのつながりをあらたに生み出していることがわかってくる。

ビーズもしくみは変わらない。

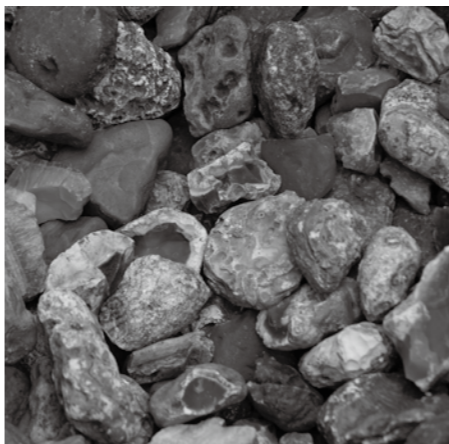
これからの人類は、ビーズからみてどこへ行くのであろうか。現在、各地で注目し始められたのがペーパービーズである。広告の紙を束ねてもビーズはできるのだ。これまでのビーズは堅い素材という共通性があったが、ペーパービーズは堅さを人も人が作り出すという点で画期的である。今回の特別展では、古今東西のビーズをとおして、ものとの、もの人、人とのあいだにどのようなあらたなつながりが生まれてきたのかを探ってみることにしよう。

インダス文明とカーネリアン・ロード

遠藤 仁 秋田大学大学院客員研究員



グジャラート地方の遺跡(カーネル)から出土したカーネリアン・ビーズ



カーネリアンや瑪瑙の原石

辺や主要都市でのみ生産されていた。

人びとを魅了したカーネリアン

そこで、筆者はインダス文明の流通路を象徴づけるものとして、カーネリアン・ロードというこゝとを提唱している。カーネリアンだけに限定しても、インダス文明内をくまなく行き交い、その移動距離は二〇〇キロメートル以上になる。またメソポタミア文明や湾岸地域まで見れば、その移動距離は三〇〇キロメートルを越える。もちろん、同じ道をたどり、カーネリアン以外の石や金属などの希少価値の高いものや、食料なども盛んに行き交っていたと考えられているが、なぜ人びとはそのような長い距離、石を運んだのであろうか。

ビーズは実用的なものではないが、いつの世も人びとは美しいと感じ、希少価値のあるものに心を惹かれる。その運搬に膨大な労力や、技術を費やし流通路が開拓され、結果的にはその路がその他のものや人、技術運び長大な流通路が形成されることになる。人びとの飽くなきビーズへの嗜好が、カーネリアン・ロードを形成し、国の領域や物流を大きく変える契機となったのである。

ビーズの交易網

インダス文明とは、紀元前二六〇〇〜一九〇〇年ごろに、現在のインドとパキスタンの国境を跨ぎ、南北約一五〇〇キロメートル、東西約一八〇〇キロメートルにおよぶ広大な範囲に栄えていた古代文明のひとつである。この文明最大の特徴は、整備された複数の都市とそれらを結ぶ、流通路の存在である。その路で運ばれたもののなかに、カーネリアン(紅玉髓)や瑪瑙、ラピスラズリ、ステアタイト(凍石)などさまざまな石のビーズやその原石もあった。

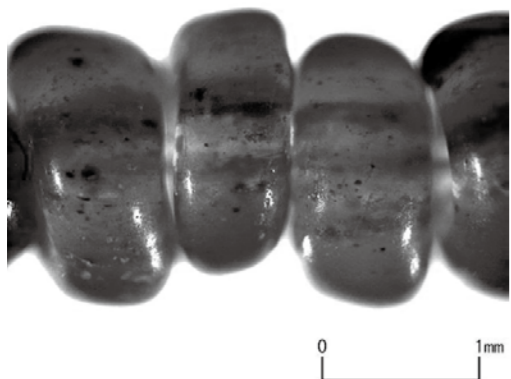
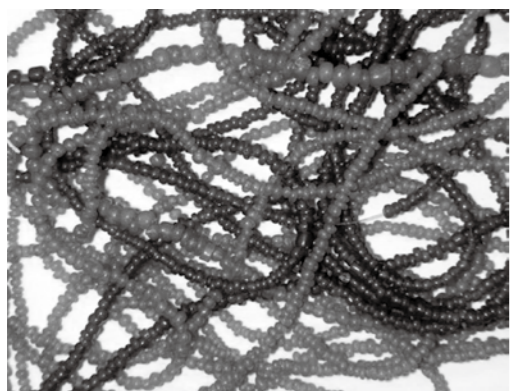
特にカーネリアン製の長さ二〇センチメートルを超える長大なビーズは、インダス文明内だけではなく、隣接するメソポタミア文明にまで流通し、インダス文明を代表する交易品のひとつであった。そのカーネリアンや瑪瑙などは、文明域南東端にあるグジャラート地方で産出したと考えられており、現在でも採掘されている。また、ビーズなどの完成品だけではなく、原石そのものや、それを作る職人、技術が広く文明内に広がっていたことがわかつている。一方、このように原石や製作技術が広範囲に移動したのは、カーネリアンや瑪瑙のみで、ラピスラズリやステアタイトは採掘地周

古代日本とユーラシアをむすぶガラスビーズ

ガラスビーズの交易圏

ここに、日本の弥生時代の墳墓から出土したガラスビーズがある。特徴は、単色の小玉で、気泡がビーズの孔と平行方向に並んでいることである。このような特徴は、これらのガラスビーズが、加熱して引き伸ばしたガラス管を分割して作られたことを示している。

これまでの考古学的な調査から、共通の特徴をもつガラスビーズが、日本列島のみならず、西はアフリカ大陸東岸部からインド南部を経て東南アジア各地に至るまでの沿岸地域に広く分布することが明らかとなっている。これらはインド・パシフィックビーズとよばれ、もともと古い生産遺跡とされるアリカメドゥ遺跡が発見された南インドを発祥の地とし、その後、東南アジア各地に生産地が拡散したと考えられている。日本列島にガラスビーズが初めて出現するのは弥生時代前期末から中期初頭にかけて(紀元前三世



日本出土のインド・パシフィックビーズ
福岡県井原ヤリミノ遺跡出土(伊都国歴史博物館所蔵)

交易ルートの発展と変化

紀である。弥生時代後期(二世紀)には流通量が激増し、古墳時代にかけて大量のインド・パシフィックビーズが流通した。その数は数十万点にのぼる。弥生時代や古墳時代といえ、中国大陸や朝鮮半島との交易ばかりが注目されるが、二千年以上も前からインドや東南アジアなどの南方起源の交易品が日本列島に到達していたのである。これだけでも、古代の日本列島が含まれていた、広大な交易圏を垣間見ることができ。

それだけではない。古代の日本列島には、さらに遠方の地中海周辺地域や西アジアで製作されたガラスを素材としたビーズも流入していた。すでに弥生時代後期後半(二世紀)には、地中海周辺地域で製作されたナトロンガラス製のビーズが流入していたことが明らかとなっている。古墳時代中期後半(五世紀後半)になると西アジアから中央アジア産と考えられる植物灰ガラスを素材としたビーズが大量に流入する。ちょうど同じ時期には朝鮮半島の新羅の領域においても同種のガラスビーズが大量に発見されている。当該時期の新羅には、西アジアから中央アジア産のガラス容器や金製品が内陸ルートで伝えられており、これらのビーズも同じ経路で東アジアにもたらされたと考えられる。五世紀後半における「西方の」植物灰ガラス製ビーズの大量流入で、それまでの「南方の」インド・パシフィックビーズを中心としたガラス製品の構成が大きく変化する。この変化は、ユーラシア大陸各地から日本列島へもたらされたガラスビーズの交易ルートの中心が海路から内陸へ変化する大きな画期を示している。

このように、ガラスビーズは、ユーラシア大陸の東端部に位置する日本列島が陸・海のルートを通じて東南アジアや南インド、さらには西アジアや地中海周辺地域ともダイナミックにつながっていたことを物語る貴重な資料である。

田村 朋美

奈良文化財研究所研究員

北米先住民のビーズ装飾

——ヤマアラシのとげからガラスビーズへ

齋藤 玲子 民俗民族文化研究部

色鮮やかに光る

北アメリカの先住民、とくにアメリカ合衆国でネイティブアメリカン、カナダでファーストネーションとよばれる人びとのビーズワーク（ビーズ細工）は、質量ともに見事と言わなければならない。特別展では、胸・背中から肩・袖にかけての上部がビーズでびっしりと埋め尽くされた革製のドレスをはじめ、靴、手袋、かばんなどさまざまな品が展示される。幾何学的なものから、花柄、馬に乗る人物像まで、多彩な文様を描くのに使われるのは、種子のように小さいことからシードビーズとよばれる一ミリ以下から数ミリメートルほどのガラス製ビーズである。

もともと早くヨーロッパのガラスビーズを北アメリカ先住民と交換したのは、一六世紀に東部に来た船乗りや漁師と考えられている。一七世紀初頭にはフランスの探検家や毛皮商人らが、後にイギリスの商人らが主要な交易品としてビーズをもたらした。色鮮やかに光るガラスビーズは、一八〜一九世紀にかけて瞬く間に先住民社会に定着していった。

根底にある装飾技術

さて、ここで紹介したいのはじつはビーズでは

ない。ガラスビーズが入る以前、衣類やかばんなどが何で装飾されていたかということである。ガラス以外にも、貝や木の実、石など自然素材で作られたビーズがあり、装飾に用いられていた。しかし、北アメリカでよく使われてきたのは、ヤマアラシのとげ (porcupine quill) なのである。

カナダヤマアラシともよばれる北アメリカでもっともよく知られている種は、極北と南東部以外の広い範囲に生息している。おもにこの動物の針状の堅い毛（ここでは「とげ」とよぶ）が装飾の材料として使われるので、クイルワークという。とげの太さは一〜一・五ミリ、長さは三〜六センチ（部位によっては一〇センチ以上）ほど、乳白色で先端は黒褐色のものが多く、質感は、人の手指の爪よりも柔らかく、プラスチックのストローに近いだろうか。

このとげを白のまま、あるいは古くは植物染料などで染めて、革製品や白樺樹皮製の容器などに刺したり、つぶして紐状に編んで巻いたり縫い留めたり、また弓型の小さな機を用いてベルト状の織物にした。もともと細かい装飾技術があったところに、ガラスビーズがすんなり受け入れられたというわけなのだ。しかし、ガラスビーズにすべ

て取って代わられたのではなく、現代でも樹皮製の小箱や髪留めなどの装飾に使われており、みかげものとしても販売されている。

今回の特別展はビーズが主役だが、それぞれクイルとビーズで装飾された儀式用のパイプや、両方が使われているモカシン（靴）も展示している。ぜひ間近でその繊細な装飾をご覧いただきたい。



H0075583 モカシン
足の甲とへらの飾りにヤマアラシのとげが、甲のふちにはビーズが使われている

台湾原住民族の多様なビーズ

野林 厚志 民俗民族文化資源研究センター

多様な素材

台湾のオーストロネシア系の先住民である台湾原住民族は、じつにさまざまな素材のビーズやペンダントを身につけてきた。ガラス、陶器や土器などのセラミック、瑪瑙などの準貴石、動物の骨、歯、角、貝殻に加えて、ジュズダマ、トウアズキ、竹、ショウブといった植物も材料とされてきた。ただし、こうした素材を使ったビーズのすべてを原住民族が作ってきたわけではない。ガラスや陶器、瑪瑙で作られたビーズの大半は、交易によって原住民族社会に入ってきたと考えてよい。そうしたビーズのなかでひととき目立ってきたのが、パイワン族のガラスビーズである。

パイワン族とビーズの物語

パイワン族は台湾の南部に居住してきた原住民族である。人口は九万人あまり、原住民族で二番目に大きな集団で、首長および貴族と平民とにわかれる階層社会を発達させてきた。ガラスビーズは交易によって得られる希少財であり、首長や貴族に流通したものと平民がもつことができたものあいだには差異がみとめられる。

例えば、波状にさまざまな色の模様全体に入ったビーズはミリミリダンとよばれ、もつとも



あらたなビーズ工芸の伝統を担うパイワン族の若者（工房「比亞的草屋」）

高貴なビーズとして扱われている。これは首長がもつことを許されていたビーズである。同様に祖先という意味をもつ「眼の玉」など、さまざまなものがある。「太陽の涙」は、地上で粟を炊いたときの煙が天空にある太陽の目に入り、太陽の流

した涙がぼろぼろと地上に落ちてビーズになったといわれる。

身分にかかわらずもつことが許されたビーズには、戦争や狩猟で功績が著しい男性に与えられる「戦士の玉」や、婚姻時に贈られる永遠の愛を意味した「孔雀の玉」などが知られている。

あらたなビーズの伝統作り

パイワン族に継承されてきたビーズの伝統は、現代になってあらたな展開を見せている。交易による外来のビーズを使っていたところを、自らその制作にたずさわる人びとがあらわれてきた。若い世代の原住民族が歴史を継承しながら、自分たちの時代の原住民族文化としてビーズ工芸を担っているのである。

特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」では、父親のビーズ作りを幼いころから見て、自らもビーズ制作を志したパイワン族の若者の作品を紹介している。パイワン族伝統のビーズだけでなく、父親の技術や思いを大切にしながら、自由な発想や豊かな感性をもって、あらたなビーズ作りになぞらわられる姿は、民族の文化とはつねに変化していく「生きもの」だということを教えてくれるのである。

オセアニアの貝ビーズ

——ソロモン諸島の貝貨を例に

後藤 明 南山大学教授

貝貨としての貝ビーズ

メラネシアとミクロネシアの一部で使われている貝貨はふたつに大別される。ニューギニア島ではタカラガイが貨幣や威信財として流通し、現在のパプアニューギニア国の通貨の名称(キナ)となっている。ただしタカラガイ製の貝貨は、貝殻一個が単位として流通する。この点でアフリカなどの事例と同様である。

もう一種類は貝殻を砕いてディスク(円盤)状に加工し穴を開け、決まった規則で複数のビーズを紐で繋いだものが単位として流通する、ビーズ状貝貨である。たとえばソロモン諸島・マライタ島のランガランガ・ラグーンは今日までこの貝ビーズ工芸がおこなわれている地域である。人びとは種々の貝殻からビーズ状の貝貨を製作し、婚資や香典用、あるいはカヌーやヤマイモ千個など限定された物との交換に使っている。また彼らが作る貝ビーズ製品には、踊りのときに身につけるヘッドバンドやアームバンド、肩掛けのような伝統的なものから、ネックレスやピアスのような西欧の影響を受けて作り始めた装身具も含まれる。婚資や限定交換につかう貝貨は赤(ウミギク)、白(サルボウ)、黒(タイラギ)と三種類のビーズを一定の規則に沿って並べたものである。規則は

厳密でそれに沿っていないと婚資として突き返されることがある。この貝貨はマライタ島の北部で流通する。貝貨を作らない集団は豚などとの交換でランガランガからこれを手に入る必要がある。一方、白い貝ビーズだけで作られる貝貨はランガランガ独自の貝貨である。婚側から嫁側に支払われる婚資支払いの儀礼では三色貝貨(一本に対して、白い貝貨二〇本(あるいは二〇本対四〇本)と組み合わせる)になっている。

代に四回おこなった観察では、一〇年のあいだだけでも新しい種類の貝が数種類加えられていた。精巧な貝ビーズができるまで

メラネシアの他の多くの島では貝ビーズ製作は男性の仕事であるが、ランガランガでは基本的に女性がおこなう。彼らは鉄槌で貝殻を石台の上で割り、蝶番などの不必要な部分をとり除く。その破片を指で縦につまんで、石の台の上で回転させながら、別の手にもった鉄錘で周りを軽くたたき、丸く整形してゆく。次の段階は、表面に深い襞のあるロム(ウミギク)貝とカカンドウ(サルボウ)貝には研磨がおこなわれる。

次は穿孔である。むかしは先端に石器をつけた舞錐式ドリルを使っていたが、今は店で買う鉄製のハンドドリルを使う。次に穿孔したディスクを二〜三メートルの糸にとおして、長い木の台の上に乗せて、水をかけながら砥石で直径五〜六ミリメートルの円形になるように研ぐ。カンナをかけるような姿勢で強く研ぐこの仕事には力があるので、この工程は女性ではなく世帯の男性がおこなうのが一般的である。

さらにケエ(アマボウシ)貝のディスクの場合、研ぎ出しをしてから、鉄板の上で加熱する。これによって暗い色の貝ディスクが鮮やかなオレンジ色に変色する。このディスクは赤と認識されるが、もともと赤はウミギク貝のビーズであったが、希少になったのでケエ貝を代用品として使うようになったのである。



嫁になる女性の前で婚資を披露する男性や父とその親族

ケニアの牧畜民サンブルのガラスビーズ

——母から娘へと受け継がれる恋人からの贈り物

中村 香子 京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員

首をビーズで埋め尽くす

無数のビーズの輪を積み重ねた大きな首飾りはマサイ系牧畜民、サンブルの女性のトレード・マークだ。彼らの首飾りのビーズはすべて、良質のガラス製品の生産地として名高いチエコ製のガラスビーズである。二〇世紀の初頭からこの地にもたらされるようになり、現金経済の普及とともにサンブルの衣装の中心的な素材となっていた。

若いサンブル女性が誇らしげに身につけている巨大なビーズの首飾りは、多くの場合、恋人である「モラン(戦士)(未婚の男性)から贈られたものである。近年は学校教育などの影響を強く受けてこの習慣は廃れつつあるが、過去一〇〇年のあいだ、サンブルのモランたちは、娘を自分の正式の恋人にするために「首をビーズで埋め尽くす必

要がある」と言い、大切なウシやヤギを売却するか、都会に出稼ぎに出て必死で現金を蓄え、大量のビーズを購入してきた。わたしがこれまで出会ったなかで、もっとも大きな首飾りは一六キログラムであった。この首飾りを作るためには、八キロのビーズとそれと同重量の針金が必要だ。針金も安いものではないが、輸入品のビーズはとても高価である。一キロのビーズの価格は、二頭のヤギに相当し、それは出稼ぎの一カ月の給料にほぼ等しい。これほど大量のビーズを与えることは、モランにとっては「甲斐性者」と褒め称えられる、自尊心を高める行為であるし、また、娘にとって、それを身につけることはとても嬉しく誇らしい。

思い出は一粒のなかに

この恋人関係はクラン(氏族)の内部で作られるが、結婚は異なるクランの人としなければならぬ。つまりこの関係は、結婚には決して結びつくことのない、未婚時代だけの関係なのである。花嫁は結婚式の前日に恋人と別れ、結婚式が終わると生まれ育った家を出て、夫となった別のクランの男性とともに彼の家のある見知らぬ地域へと嫁いでいく。このとき、自分のものは何ひとつ持参することがゆるされていないが、身体の一部と

して、ビーズの首飾りだけは身につけたままでいく。そして嫁ぎ先では、少しずつこの首飾りからビーズをとって、あらたな家族や友人となる女性たちにわけ与えたり、出産後には子どもにお守りや腰ベルトを作ったり、また、娘が一〇歳前後に成長したころには、ていねいにビーズを一粒ずつ選び組み合わせながら、彼女の初めてのビーズの首飾りを作っている。

こうして結婚後の人生を過ごすうちに、女性の首飾りのビーズはだんだん少なくなっていく。すると、もっとも内側の、首にはりつくほどに径の小さな首飾りが見え隠れし始める。これは、彼女自身が、子どものころに母親に初めて作ってもらった首飾りだ。その一部には、母親が子どものころに祖母に作ってもらった首飾りからとったビーズも使われている。女性たちは、自分の首飾りを作りあげている無数のビーズの一粒ひとつぶをすべて識別して、それぞれについて、いつどのように入れて入れたのかをしっかりと記憶している。そして、首もとのビーズをそっと触りながら、自分の結婚前の恋人との思い出、子ども時代に母に初めてビーズをもらったころの思い出、母から聞いた母の娘時代の恋人との思い出、さらには、祖母やその恋人との思い出を生きいきと語り出す。



「娘の美しさはビーズで作られる」と人びとは言う

〇〇してみました世界のフィールド

中国の鉄道の今むかし

塚田 誠之
民博 民族社会研究部



中国の鉄道に乗ってみました

1985年11月、広州から特急列車に乗って北京へ向かう途中、岳陽に着いたところ

中国で初めて鉄道に乗ってから30年あまりが経つ。
当時は広州から北京まで36時間というながい旅路だった。
高速鉄道に乗っていると、当時の懐かしい記憶がよみがえってきた。



寝台車コンパートメント



がついていないので、見られないように上手に着替えをする必要がある。
日本人だとわかると、ほとんどの人はまず中国語ができるかどうかを聞いてくる。その後には中国での暮らしに慣れたか聞いてくる。中国では仕事の内容や人柄よりも中国語の能力が評価の基準とされる場合が少なくない。自国を中心として他国を低く見がちな中華思想から抜け出せないのかもしれない。

中国ならではの事情

オンライン化されつつあるとはいえ、辛抱強く並んで切符を購入せねばならないことが多い。駅の窓口が集まる膨大な人びとをかきわけなければならぬ。最近では列車に乗るのに幾重もの保安検査があつてわずらわしい。ナイフ類は持ち込めない。改札は列車到着直前まで開かない。また、在来線は駅が近づく、排泄物の垂れ流しによる黄害防止のため車掌が便所の鍵をしめるので、次の駅までの時間を把握しておく必要がある。荷物の盗難にも気を遣わなければならない。さらに、正規の車内販売員のほかに無関係な、いかにも怪しげな商人が堂々と物を売るものもアリだ。みるからに安物のシェーパーを言葉巧みに売る数人組の商人に出会ったことがある。食堂車は料理がまずくて高い。食堂車の厨房で作る弁当は肉野菜炒めのぶっかけ飯が多く、日本の駅弁ほど種類は多くない。弁当も美味とはいえないので、カップ麺を持ち込むのはごく普通だ。多くの乗客はマイ魔法瓶

「乗り鉄」、中国に挑む

鉄道マニアとよばれる人には、写真を撮る「撮り鉄」、車両を楽しむ車両鉄、運行計画や時刻を表示した図表を見て楽しむスジ鉄・時刻表鉄、駅弁鉄等々、とじつに多様で、鉄道の楽しみ方はさまざま。わたしは鉄道に乗って旅を楽しむ「乗り鉄」である。時刻表を見て日程を組むのも好きだ。かつて南は山川(鹿児島県)、北は名寄(北海道)、東は厚床(北海道)、西はたひら平戸口(長崎県)、と日本全国各地のさまざまな路線を乗って楽しんできた。今は廃止になったフルートレインも好きだった。そんなわたしが一九八五年秋に中国に留学することになった。

ながい旅路

最初に中国で鉄道に乗ったのは一九八五年二月のこと、留学先の広州を夜六時過ぎに発ち北京までの三三〇〇キロメートルを二晩、およそ三六時間をかけて走る、もっとも速い「特快」の「軟臥」(二等寝台)に乗った。北京の図書館で文献を閲覧するのが目的だった。当時は、航空券が高く、飛行機に乗る人はまだ少なかった。その後、硬臥(一等寝台)、軟座(二等座席)、硬座(二等座席)のすべてを経験したが、寝台にせよ座席にせよ知らない人と一緒になるので、一応、暇つぶしに世間話もする。それでもじきに退屈してくる。最初に乗車したときには物珍しさも手伝って、車窓の風景に見入ったものだったが、広大な中国の風景は日本のそれに比べて変化に乏しいので何度も乗るうちに飽きてくる。かつて北京に通う列車で定員四人のコンパートメントの軟臥に、三人の若い未婚女性グループと同室になることもあった。昔の日本の寝台車のようにベッドにカーテン



朝、駅の洗面所 長沙駅



和譜(わかい)号

を持参して乗る。給湯器があつて、いつでも熱いお茶を飲むことができる。ちなみに中国で売られているペットボトルのお茶は砂糖入りなのでわたしの口に合わない。

速さと快適さと

二〇〇八年頃から開通し普及しはじめた高速鉄道は確かに新幹線並みに速くて便利だ。車なら迂回路を何時間もかかるところ、三〇分程度で着いてしまうから驚きだ。車両製造の際にドイツ・フランスのほか日本の会社も入札した経緯があつて、座席の配置や車両の造りは、どことなく新幹線を思わせる。高架でトンネルが多いのも似ている。高速鉄道を利用すると、北京―広州間が八時間、昔は二六時間かかった広州―南寧間が四時間ほどで行ける。運賃も広州―南寧間が二等座席で二七〇元(日本円で三〇〇〇円ほど)と安価で行き来することができ、出稼ぎ労働者にとっても利用しやすい。



高速鉄道車内

ただし、市街地から離れた地に新駅があつてそこに行くまでが遠い場合もある。在来線にもいえることだが、駅構内はながく急な階段を上り下りせねばならない。バリアフリー等の問題の解決はまだまだ先のことのようだ。総合的にみて日本の鉄道の快適さにはまだまだおよばない。

■関連イベント
「体験コーナー」(仮)
ダチョウの卵の殻でできたビーズのアクセサリなどをさわったり、ドングリなどの自然素材をビーズとしてつなげたりしていただけます。詳細が決まり次第、本館ホームページでお知らせします。

日時 特別展会期中
会場 特別展示館2階
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

企画展
「津波を越えて生きる」
大槌町の奮闘の記録」
将来起こりうる大規模災害に対する備えの必要性を示し、災害を乗り越えて過去から未来へと文化や伝統をつなぐことの意義を考えます。

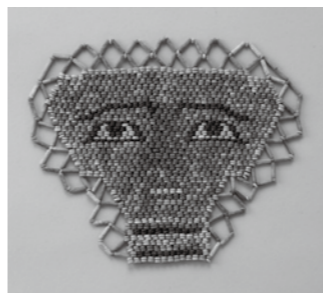
会期 4月11日(火)まで
会場 本館企画展示場

公開講演会
「恵みの水、災いの水―川、湖、海―」
津波、水害、干ばつなどの水にかかわる災害への人の対応について研究や政策実践を行ってきた講演者が、恵みの水、災いの水という視点から、人と水との多様ななかかわりかたをこれからの課題を論じます。

日時 3月21日(火)18時30分～20時45分
(17時30分開場)

開館40周年記念特別展
「ビーズ―つなぐ・かざる・みせる」
飾り玉、数珠玉、トンボ玉などを総称するビーズ。本展示では、私たち人類がつくり出した最高の傑作品の一つとしてビーズをとらえて、つくる楽しみ、飾る楽しみをとおして日本や世界の人びとにとってのビーズの魅力を紹介いたします。

会期 3月9日(木)～6月6日(火)
会場 特別展示館



ミラのビーズマスク(エジプト)

会場 オーバルホール
(大阪市北区梅田、定員480名)
講師 竹沢尚一郎(本館教授)
嘉田由紀子
(ひびこ成蹊スポーツ大学学長)
主催 国立民族学博物館 毎日新聞社
※要事前申込、参加無料、先着順、手話通訳あり
お問い合わせ先
研究協力課 研究協力係
06・6878・8209

みんなく春の遠足・校外学習
事前見学&ガイダンス
春の遠足・校外学習にむけて、事前見学会来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。

日時 4月4日(火)、6日(木)14時～16時30分
会場 本館第5セミナー室ほか
※参加無料
ホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。
お申し込み・お問い合わせ先
国立民族学博物館案内所
電話 06・6878・8341
Fax 06・6878・8441

国際シンポジウム
「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り―あせとこの世をめぐる儀礼」
東アジアに広く見られる7月の死者儀礼は、日本ではお盆として現在も全国的に行われ、最も身近な毎年の行事のひとつです。この7月の儀礼をアジア地域の広範な視野において比較検討します。

日時 3月4日(土)10時～17時30分
3月5日(日)9時30分～17時30分
会場 本館第4セミナー室(定員70名)
※要事前申込、参加無料
カレッジシアター
「地球探究紀行」
時間 13時～14時30分
会場 あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費各回1000円
主催 産経新聞社
共催 近鉄文化サロン、スペース9
特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団
3月8日(水)
南太平洋の伝統医療とむぎあう
―マリアア対策の現場から―
講師 白川千尋(大阪大学教授)

3月29日(水)
小さなビーズがつくりだす世界
―アフリカ、アジア、そしてアメリカ―
講師 池谷和信(本館教授)
お申し込み・お問い合わせ先
ウエーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087

●みんなく無料シャトルバスのご案内
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間直通無料送迎バスを特別展「ビーズ―つなぐ・かざる・みせる」の会期中に運行します。
3月9日(木)～6月6日(火)の
土曜・日曜・祝日
1日11往復、所要時間10分、無料
運休日 平日、5月13日(土)、14日(日)、20日(土)、21日(日)
※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。

国立民族学博物館発		大阪モノレール万博記念公園駅発	
時	分	時	分
10	50	10	06 36
11	20	11	06 36
12	30	12	46
13	00 30	13	16 46
14	10 40	14	26 56
15	10 40	15	26 56
16	30	16	
17	00	17	

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

みんなくセミナー

時間 13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)
第466回(3月18日(土))
人間にとってビーズとは何か?
―特別展「ビーズ―つなぐ・かざる・みせる」から―
講師 池谷和信(本館教授)



ナイジェリアのビーズ職人

わずか直径が数ミリのものからつくりだされるビーズの世界。これは、10万年前に生まれて現在では世界中にひろがっています。美しさに秘められた世界各地の人びとの知恵を紹介いたします。

みんなくウィークエンド・サロン
研究者の話
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
ただし、12日(日)は展示観覧券不要
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなく」の展示資料」について分かりやすくお話しします。

3月5日(日)14時30分～15時 本館ナビひろば
イスラームとムスリムの関係性
話者 相島葉月(本館准教授)
3月12日(日)14時～15時 本館ナビひろば
新構築展示の「つなぐ」を語る
話者 須藤健一(本館館長)

●アイヌの伝統的家屋「チセ」の茅の葺き替え作業に伴う本館展示場の一部閉鎖について
アイヌの文化展示場に展示中の伝統的家屋「チセ」の屋根と壁を全面的に葺き替え、3月23日(木)に公開いたします。この作業のため、朝鮮半島の文化、中国地域の文化、中央・北アジア、アイヌの文化及び日本の文化の各展示場を、3月22日(水)まで閉鎖いたします。

●無料観覧日のお知らせ
3月12日(日)は、万博記念公園ふれあいの日のため、本館展示と特別展を無料で観覧いただけます。

●小・中学生の観覧無料化について
4月1日(土)より、中学生以下は観覧料無料となります。

刊行物紹介

■岸上伸啓 著

『文化人類学―人類を探求し、新たな人間観を創出する学問』



風土デザイン研究所
1,800円(税別)
本書は、文化の定義に始まり、文化人類学の視点や調査・研究の方法から家族・親族論や人間どうしが行う贈与・分配、再分配、交換などの行為、また、文化の変化、現代社会における開発行為に対して文化人類学が果たす役割、そして、文化人類学という学問の変貌および将来の展望を解説するとともに、文化人類学全般をコンパクトに紹介する。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室(定員96名)
※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円
第465回 4月1日(土)13時30分～14時40分
「特別展「ビーズ―つなぐ・かざる・みせる」関連」
つなぐ・かざる・みせる
―ビーズにさぐる人類の多様な営み―
講師 池谷和信(本館教授)

わたしたちの祖先が、およそ10万年前に生み出して以来世界の広範な地域で使用されているビーズ。人とかかわりは「つなぐ」「みせる」「かざる」の三つに大別されます。その素材やかざり方は、文化や自然環境によってさまざま。諸民族のあいだでは、儀礼に使い、社会的地位や民族のアイデンティティを示すなど、大きな役割を果たしてきました。地球に暮らす人びとの多様な営みを、ビーズとおしてさぐるみましょう。
※講演会終了後に講師の案内のもと、特別見学会をおこないます(40分)。

第466回 5月6日(土)13時30分～14時40分
第二言語としての日本語―実感・体感的言語案内―
講師 飯泉菜穂子(本館特任准教授)
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

東京講演会

第118回 5月13日(土)13時30分～14時40分
「第89回民族学研修の旅関連」
モンゴル高原における遊牧民の遺産
講師 小長谷有紀(人間文化研究機構理事、本館教授)
会場 モンベル御徒町店4Fサロン
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。
※要事前申込(定員60名)、会員無料、一般500円

第89回民族学研修の旅

モンゴル、遊牧の民に出会う
―揺籃の地オルホン川上流域と草原都市ウランバートルを訪ねる―
8月7日(月)～8月14日(月) 8日間

味の根っこ

わが家の味 雑煮

いしげ なおみち
石毛 直道
民博 名誉教授



おせちと雑煮で正月を祝う親子

多様な郷土料理

コンビニなどで買ってきた既製品の料理が、家庭の食卓に並べられることが多くなった。台所仕事は、電子レンジで温めることと、食器への盛りつけ、食器洗いだけですませることもできる。そんな現代でも、かならず手作りの家庭料理で供される食べ物がある。それが正月の雑煮である。

日本の家庭料理のなかで、郷土料理の地域差をいちばん反映しているのが雑煮である。また、同じ地域でも、雑煮の味つけなどに微妙な差があったりして、雑煮は「わが家の味」を代表する食べ物である。わたしの家では、正月に二種類の雑煮を食べる習わしがある。それは、わたしと妻の出自にかかりをもつことである。わたしは二〇歳まで東京近郊で育ち、その後は関西で暮らしている。妻は京都育ちである。そこで、元旦には妻の作る丸餅をいれた白味噌仕立ての京風雑煮を食べ、二日と三日は、わたしが作る焼いた角餅をいれた醤油味のすまし汁の東風雑煮を食べるのだ。

日本の餅の形状の分布は、関ヶ原から東の地域では、のし餅を四角に切った角餅地帯で、関ヶ原より西の地帯は餅を手でまるめた丸餅地帯である。角餅地帯ではすまし汁の雑煮をつくる。丸餅地帯の関西から徳島県平野部にかけては白味噌雑煮であるが、ところどころ赤味噌の雑煮をつくる地方もある。この味噌雑煮地帯よりも西側の西日本では、丸餅をいれた醤油味のすまし汁の雑煮を食べるのだ。

『源氏物語』に、鏡餅を食べて歯固めをすることが記載されているので、平安時代から正月に餅を食べる風習があったことがわかる。しかし、雑煮という料理を正月に食べるようになったのは、比較的新しいことである。

雑煮ということばが最初にあらわれるのは、京都の吉田神社の神官の日記である『鈴鹿家記』の二一三四年一月二日の記事である。室町時代には雑煮を煮雑とも表現したが、さまざまな材料を餅と煮るという意味では共通している。雑煮や煮雑は公家や武士の献立にあらわれるが酒の肴として、正月以外の時節にも食べられた料理である。武士の宴会料理として発達した本膳料理では、宴の最初に儀礼的に冷や酒を三度飲み回す式三献のときに、しばしば雑煮が酒の肴として供された。公家や武士の行事食であった雑煮で正月を祝うことは、京都の寺社や町人からはじまったようである。江戸時代の前期には、丸餅を昆布だしと白味噌で煮た京風雑煮が、京都の正月の食べ物として民衆に定着したようである。

雑煮が正月の定番料理として全国に普及するのは、江戸時代後期になってからのことである。角餅、鰹だし、醤油味の江戸風の雑煮は参勤交代で、江戸と領国を往来する武士たちが広めた



棒状の餅を薄切りにし、少量のニンニクをいれて作った牛肉スープでネギと煮て、溶き卵をいれ、刻み海苔(のり)を散らした韓国の雑煮トックツ



焼いた角餅、鴨肉(かもにく)、鳴門巻き、小松菜、白ネギを醤油味のすまし汁仕立てにした東京風雑煮



サトイモ、丸餅を白味噌で煮て、ユズの皮と削りカツオを散らした京風雑煮

ものであろう。雑煮が正月には欠かせない料理として、日本国中で食べられるようになったのは、一九世紀になってのことである。

簡単に作る韓国風雑煮

最上の雑煮作りには雑肉(まじにく)のスープを使用するそうだが、家庭では牛肉や鶏肉のスープで作るのが普通である。ここでは、手間のかかるスープ作りを省略して、既製品のスープで手軽に作る方法を紹介することにする。

- カレットツ
(筒状の餅を雑煮用に切ったもの)
- レトルトの牛肉スープの素
- ニンニク
- 醤油
- 牛肉
- 長ネギ
- 卵
- 刻み海苔

※すべて使用する分量はお好みにまかせ。

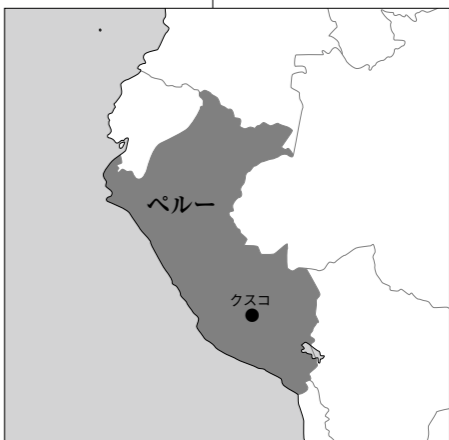
- ① 韓国食材専門店で、薄くスライスしたカレットツのパックと、レトルトの牛肉スープの素を購入する。カレットツは水に漬けてもどしておく。
- ② スープの素に漬したニンニクをいれて火にかけ、醤油あるいは水で好みの味にする。一緒に牛肉を煮てもよい。
- ③ ②に水でもどしたカレットツをいれ、柔らかくなったところで、長ネギを数センチの長さに切ったものを加え、ひと煮立ちさせる。
- ④ 溶き卵を流し入れふんわりと固まったらできあがり(溶き卵ではなく錦糸卵を使用してもよい)。
- ⑤ 食器に盛って、刻み海苔を散らし、スプーンをそえて配膳する。

◆キムチと一緒に食べるとおいしい。

危機にさらされる世界遺産 登録三〇年が経過したクスコの今

八木 百合子
民博機関研究員

文化遺産登録は、人類共通の遺産を保護し後世に引き継ぐことを目的としている。だが、経済的利益や政治的思惑に左右され、文化遺産を守り続けることが困難になる場合がある。クスコもその一例である。文化遺産をめぐる議論が尽きることはないだろう。



古都クスコの街並み

南米屈指の観光地として知られるクスコ。かつてインカ帝国の都として栄え、一六世紀のスペイン植民地化以降はアンデスのキリスト教布教の中心地となった街には、インカ時代の石造りの建築や荘厳な教会群をはじめ、その長い歴史の痕跡が随所に残る。大聖堂が建つ広場を中心にコロニアル様式の建物が連なる旧市街地は、歴史保護地区に指定され、一九八三年には世界遺産にも登録されてい



植民地時代に建設されたサント・ドミンゴ教会。建物はインカの太陽神殿の石組みの上に建てられている

る。クスコを訪れる観光客の数は年々増加の一途を辿っており、ペルーを訪れる外国人観光客の半数以上がクスコを目指すほどである。地元では増え続ける観光客に対応するために、宿泊施設の増強やクスコへの新国際空港の建設計画などインフラ整備に拍車がかかっている。

登録抹消の危機!!

ところがそのクスコが今、世界遺産登録抹消の危機にさらされているという。盛り上がる観光開発に水を差すようなニュースが大きく報じられたのは二〇一六年。火種となったの

は歴史地区に新しく建設予定のホテルである。この建物が歴史地区の建築基準に違反していることが問題となり、クスコ市と建設事業者のあいだに軋轢が生じているのだ。ホテル側は地上二階と定められた上限を大幅に超えた、地上六階・地下五階の建物を設計。二〇一五年に建設が着工され、異様な高さの建物が姿をあらわすやいなや、事態に気づいた住民らによる抗議活動や非難の声が高まった。慌てた市は工事の中止を要求。こ

れに対して建設業者は、平地の建設とは異なり、段差のある傾斜地を利用していため、事実上高さ制限に抵触しないと主張。断固として推進姿勢を崩さない。結局、二〇一五年末に市が当初付与した建設許可を無効としたことで中断を余儀なくされたが、事態はさらに訴訟にまで連れ込んでいる。

この騒動はたちまちユネスコ事務局の耳にも届いた。事の次第を重大に受け止めたユネスコは、イコモス（文化遺産の保全状況の監視をおこなうユネスコ

の諮問機関）の調査団を派遣。その結果、ホテルの規模は歴史地区の「普遍的な価値」を脅かすものであり、歴史地区が保つ調和的な景観を損なうことになりかねないとの見解を発表した。その後ユネスコは市に対して、事態が遺産に及ぼす悪影響を懸念するという警告文を発送した。これを受け、現地の関係者のあいだでは、登録が抹消されるかもしれないという危機感が生じている。

のまさに政治的混乱を利用したものだといえる。それもあ

世界遺産を保持し続けること

こうした騒動から考えさせられるのは、各地で世界遺産への登録が相次ぐ一方で、遺産の永続的な保護をめぐる問題、その後の行く末である。「世界遺産ブーム」のなかで、各国では登録へいかに漕ぎ着けるかという



クスコのスターバックス・コーヒー。街並みに合わせた独特の外観。歴史地区では景観保護のため派手な看板が規制されている



市内中心部の風景。赤茶色の日干し煉瓦の屋根が続く

めぐる問題だけではない。住民の反対運動は、条例を無視して強引に建設を進める巨大資本家やその進出を容認する行政に対する不満の表明でもある。じつは、建設を進めているのは外資系の大手ホテルチェーンなのである。驚いたことに、事の発端となった市の建設許可は、前議会の任期終了二日前（二〇一四年二月末）に下りていたのである。許可申請は、政権交代期

のまことに政治的混乱を利用した

今回の警告では、ホテルの建設が景観を損なう脅威となることが一義的な問題とされているが、まさに加速する観光開発への警鐘ともいえよう。このまま当事者たちが一步も譲らないまま膠着状態が続けば、幽霊屋敷のように建設途中で放置された建物は「負の遺産」としてネガティブなイメージとなりかねない。世界遺産に登録されて三〇年以上が経ち、自分たちの足元を見つめなおす出来事となったに違いないだろう。

頑張りすぎない手芸



1歳の息子にママが手作りした王冠。最近、誕生日だけでなく、赤ちゃんが寝ている間に親がいろいろなテーマで演出し撮影する「寝相アート」が流行り、インターネット上では小道具やコスチュームなどの手作り情報も多く見られる(撮影・表 恒匡)

思い出作り、満足感、気安さ、適度な脱力感、かわいい……。
「手作り」に対する意識は、時代やライフスタイルの変遷とともにどのように変化しているのか。「手芸」の今に迫る。

ライフスタイルと手作り
戦後の女性雑誌は、理想の主婦と家庭ものや洋裁、編物が掲載されたもののおもだったが、一九七〇年創刊の『an・an』はグラフィカルで女性がもっと自由に旅しいろいろ考え体験することを後押ししてくれる雑誌であった。このころすでに服は、作るのではなく既製服を選んで買う時代になっていた。一九七六年都市型DIYショップを目指し生まれた東急ハンズは、大学生

や若者を対象に「男の手作り」店として、手で作る喜びと新しいライフスタイルを提案した。プラプラと店内を歩きまわり、暮らしのヒントを見つけるとは、男性だけでなく「センスの良い女性の作り手」を生み出すきっかけとなり、また、一九七七年創刊の『クロワッサン』が公募展「黄金の針賞」を設けたことで、主婦層が誰それの奥さんではなく、自分の名前前で外へ発表する機会を得た。

夢見る手芸——プロとアマの曖昧な境界
「手芸」は、女性の趣味あるいは、内職として、クリエイティブな行為の外に置かれてきたが、近年作り手の意識が変わりいろいろな方向へと展開を見せている。

今の若いママ世代にとって、手作りは新鮮で自分たちの生き方や楽しみ方の選択肢

り乱れの手作りマーケットが多く生まれている。
「手芸」は、完成のお手本があり真面目にそのとおりに作ることが良いとされてきたが、「今の手芸」は、技法をすこし知ればあとは自分流に作るということも多く、自分らしさやストーリー性がポイントとなっている。

ている。今まで手作りにあまり見られなかったグロテスク・ファンタジーの要素も加わった。

芸大生と手芸

近頃は、頑張りすぎない生き方や人のつながりをテーマに刺繍やリメイク、パッチワークなどの技法を取り入れた表現が芸術大学でもよくみられる。また、何をテーマにどのような作品にしたいかよりも、型紙を延々と彫っていたという学生や小さなお細工物を作りたいが学生もいる。端切れをブローチなどにし、手作りマーケットなどで売る事にも積極的で、課題制作よりも熱中しているようにさえ感じる。素材や技法の造形性に挑戦することよりも、黙々と手芸のような取り組みかたをすることで、何か掘りどころを求めているのだろうか。

かわいい文化と手芸

「かわいい」が世界共通語として認知されるようになり、それまで上から目線で使われてきたことがモノにもコトにもダレに対してでも活用できる魔法のことばとなった。「かわいい」と「手芸」には共通する特徴がある。共通するというよりもかわいい文化に「手芸」も飲み込まれたのだろう。その特徴は、気楽で脈絡がない、素人で



野田涼美 京都造形芸術大学こども芸術大学「まきまきしっぽ」2016。こどもが上手に完成させることよりも、からだ全体でコミュニケーションをとることを体感するワークショップは、最後に自作のしっぽで変身した親子と学生が「しっぽとりゲーム」でかけ回り大騒ぎとなった(撮影・表 恒匡)

も真似できそうに思える際がある、スマートさやクールさに欠ける、主義主張がなく何かを強制されることもない、自立していない感がある、緊張感がなく懐かしさや癒しを感じる等々だ。わたしは決して手芸を軽んじているわけではない。モヤモヤとして掴めない甘さに大変居心地が悪く苛立ち(いらだ)はするが同時に、誰でもすぐに加わることでできる現代の手芸の有り様に何か大きな役割と可能性があるのではないかと感じているのだ。

野田涼美 京都造形芸術大学特任教授

おしりふき



What's in a name?

菊澤 律子

民博 先端人類科学研究部

世界にはまだトイレが完備していない地域も多く、ウオッシュレットにすっかり甘やかされているわたしたちが調査に行くときには、周到な準備が必要だ。「原っぱの真んなか・囲いなし」という環境については、慣れれば済むが、さて、用を済ませた後の始末はというと、わたしたちの柔なお尻は適応力に乏しい。かくてスーツケースには、滞在期間分の巻物が入ることになる。ウエットティッシュならぬ、ウエットトイレトペーパーも数パック。「リフレッシュレット」というおしゃれな商品名がついているが、日常語としてはちと長すぎ、我が家では「おしりふき」とよぶようになった。用途に基づく命名である。ちなみに日本では、平安時代までは木べらが使われたが、江戸時代になって「落とし紙」が使われるようになったらしい。水で洗うのはもちろん、縄を使うとか、犬になめさせるとか、調べてみると世界各地でさまざまあるようで、経験不足を痛感させられる。

マダガスカルのベチミサラカ地域に調査に行くときにも、「おしりふき」は必須アイテム。首都から地方首都に向けては三人乗りの長距離バスに乗る。詰め込まれて七時間、途中で必要が生じたときには天井をたいてて合図をする。乗り物が原っぱの真んなかで止まり、乗客は思い思いの方向に散つてゆく。乗り換えてさらに四時間半、終点の街からは徒歩で一時間。途中で必要になったらもちろん、原っぱのなかに入る。ポケットには紙製品。そうこうして到着したのは、田ん

ぼの真んなかにある小さな村だった。この辺りは、クローブやライチが換金作物となっており、収穫期には皆、そのことで頭がいっぱい。滞在時間が限られているわたしは、それでも言語調査をする。みんなが話したいクローブの現地名、部分名称から始めて、クローブ抽出装置の名前、装置に生えているキノコの名前、周りに生えている草の名前、と、少しずつ移動しながら順に聞いてゆくと、植物に詳しい人が集まってくる。にぎやかな村人たちに囲まれて、村から少し離れた原っぱのなかで書きとりをしていたときのこと、突然誰かが叫んだ。「おしりふき!」「えっ?」とわたし。「これこれ!」。手には、濃い緑色で比較的面積のある丸い形の葉。「やわらかくてちょうどいいでしょ?」。きょとんとするわたしに一同、大笑い。そうなんだ。「おしりふき」という名前の草なんだ。本当に使うんだ。言われてみれば、狩猟採集民が植物の葉を使うというのは聞いたことがあった。どうして思いつかなかったんだろう?

帰国後、そんな名前の草なんて日本にはきつとないよね、と思いつながら検索してみたところ……「ママコノシリヌグイ(継子の尻拭い)」がヒットした。韓国では「嫁の尻拭き草」とよばれるとか。別名トゲノバ(棘蕎麦)とよばれるこの植物は、茎や葉がトゲに覆われている。「憎い」継子や嫁の尻をこの草で拭くということらしい。うーん、こちらは、本当の用途に基づく命名でないことを祈る。

編集後記

貴金属はもとより装飾品に興味がないため、ビーズに触ったのは、小学校低学年くらいが最後かもしれない。そのためビーズというと、子ども（とくに女の子）のおもちゃという印象しかなかった。本号のビーズ特集はそうした小生の長年にわたる偏った思い込みを正してくれた。特集をとおして読んで驚かされるのは、細工の精巧さと地域ごとのビーズの素材と使用法の多様性である。かつての恋人からもらったビーズ細工を結婚後も誇らしく首に飾るご婦人の心境というのは、まだまだ尻の青い小生にはなかなかにはかりがたい。またそうしたさまざまな違いがあるにもかかわらず、ビーズが交換財として幅広く使用されているという事実は、まことに興味深い。

まもなく開催される開館40周年記念特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」をみながら、これまで知らなかったビーズの魅力を学びつつ、人類における位置づけを考えてみたい。

なお本号で執筆して頂いた須藤健一館長と塚田誠之教授は、この3月をもって退職となる。みんなぱくのスタッフも時とともに変わってゆくが、『月刊みんなぱく』は、みんなぱくと人とをつなぐ媒体としてあり続けたいと思う。(丹羽典生)

●表紙：巨大な首飾りを誇らしげに身につけるサンプルの娘。ガラスビーズ製の首飾りは16キロもある。 ケニア 撮影・中村香子

次号の予告

特集

新館長就任インタビュー

月刊みんなぱく 2017年3月号

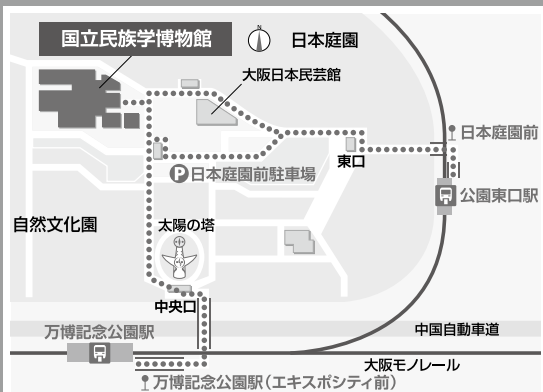
第41巻第3号通巻第474号 2017年3月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 **国立民族学博物館**
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信
編集委員 丹羽典生(編集長) 河合洋尚 菅瀬晶子
南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一孝 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」 「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料) から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんなぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんなのはくぶつかん みんなばく

MINPAKU

アイヌの伝統的家屋「チセ」を 全面葺き替えます！

— 3月23日（木）公開 —

現在、アイヌの文化展示場では伝統的家屋「チセ」の茅の全面葺き替えがおこなわれています。「チセ」は、1979年11月の本展示場のオープンにあわせ、故・萱野茂さん（萱野茂二風谷アイヌ資料館前館長）をはじめとする北海道沙流郡平取町二風谷の方々の手で造られました。アイヌの文化展示のなかでも、もっとも目を引く再現展示です。今回の葺き替えも、棟梁の尾崎剛さん、萱野茂さんの息子・志朗さんや孫・公裕さんなど、二風谷の皆さんに来ていただきました。「チセ」は、今は住まいとして使われていませんが、建築技術が脈々と継承されているからこそ、伝統的な素材と技法に則った葺き替えができるのです。

沙流地方の「チセ」の屋根や壁には茅（ヨシ）が使われており、葺き替えでもすべて現地で採取されたものを使用しています。「チセ」は厳しい冬の寒さに耐えられるよう、



葺き替え前の「チセ」

屋根も壁も厚く造られているため、10トントラックいっばいの大量の茅がみんなばくに運ばれました。同様に、茅を束ねるシナ縄（素材はシナノキ樹皮）も二風谷の方々が一本人づつしたものを使用しています。現在、展示場の一部は葺き替えのため閉鎖されており、新しく生まれ変わった「チセ」は3月23日（木）に公開します。

この完成をもって、2009年から続く本館展示のリニューアルがすべて完了します。今年開館40周年を迎えるみんなばくは、新しくなった展示で皆さんの来場をお待ちしています。これからのみんなばくにご期待ください。



二風谷からみんなばくに運ぶため、2メートルを超える長さの茅をトラックに積み込んでいる。(2016年9月)



屋根や壁の茅を束ねるシナ縄

みんなばくをもっと楽しみたい人のために——— 会員制度のご案内

詳細については、「国立民族学博物館友の会（一般財団法人千里文化財団）」までお問い合わせください。

電話06-6877-8893（平日9:00～17:00）

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんなばく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんなばくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんなばくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館

キャンパスメンバーズ

みんなばくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。